

下町のころを撮る

たかなし 豊
高梨



一九三五年、東京生まれ。五八年、日大芸術学部写真学科卒。六四年、第八回日本写真批評家協会新人賞受賞。六六年「東京人」六七年「NEW YORK」第五回パリ国際青年ビエンナーレ写真部門最高賞受賞。七四年、写真集『都市へ』、七七年、写真集『町』など。

私の生まれは牛込神楽坂で、家は花街のなかで待合をしていたが、私が学校にあがるようになって廃業してしま

昭和十年代の神楽坂は、山の手と下町の中間らしいハイカラな雰囲気を持たせられており、田原屋、白十字、紅屋あたりを、早稲田の学生が闊歩していた。「おひろめでござあい」といって若い衆が芸妓の手拭を配ってきたり、宵の門前に盛り塩などするのを、子ども心によく覚えていた。

そのころ、円タクに乗って浅草などへもよく遊びにつれて行かれた。こんど、下町の写真集を出すために三年がかりで下町界隈を歩き回ったのだが、まるでガキの時間にまぎれこんだのではないかと思うほど、下町は生きていた。私の記憶としての下町が、そっくりそこにあった。私はそれを、そのままに写した。

といっても、私は懐古趣味で下町を撮ろうとはしなかった。情緒におぼれ

て下町を写すつもりはなかった。下町を写す前に、私は『都市へ』という写真集を手がけたのだが、それは、未来への透視として街と取り組んだのだ。だから、こんど下町を撮るにしても、私のなかにある古い下町を一度否定した上で、次の写真行為のために、もう一度足もとから見直す作業をしてみようという気持ちで強く働いたのだった。

小暗がりのにじむ暮らしのツヤ

下町を歩いて、今さらのように強く感じたのは、山の手には「生活」があるけれども、下町には「暮らし」があるということだった。

そこでは、家も建具も道具も、大切に使われており、使いこんで黒光りがしているのだ。大切に使うということ、手がかる。開き戸も土間も上がりがまちも、毎日拭きこみ掃き清めなくてはサマにならない。そこから、家具

調度すべてに人間の暮らしがにじみ出ている。私はこんどの写真集ではほとんど人間を撮らなかつた。だが、一枚の写真に、人間の香りがするのには、道具も建物も家並みも、すべてが人間と深くかわりあっているからであらう。

このような町で暮らしてきた下町っ子は、他所へ流れては生活してゆけないのではないだろうか。下町では、人はどっかりと腰を落として暮らしているな、という感じだった。

撮影を申し込んで、ほとんど断わられたことはない。その秘密は、金でも手土産でもない。礼をつくして、あいさつすることである。下町は礼儀が生きている世界であった。

ある日、谷中のアカ細工屋で撮影を頼んだことがあった。偏屈そうなおやじさんは、いっこうにフイゴの手を休めず黙ったまま。何度か言葉をかけると「勝手にしな」と一言。

この時は天候の具合が悪くて、日を改めてまた行ったのだが、先の日の写真を渡すと、遽に態度が改まった。「いままで来た連中は写真の撮りっ放しで、写真もよこさず、掲載誌も送ってこない。まるで撮り逃げだナ。あんたは違う」と言うのである。